

発達をふまえた音楽のあり方

仲野悦子

The State of Music Based on a Child's Development

Etsuko Nakano

Summary

During a child's growth, they become aware of sounds in their environment and can be influenced by these newly discovered sounds, especially when young. It is considered that the role of music in childcare provides children to feel melody, rhythm, and harmony in their daily lives or even when praying.

What is necessary is not to just conduct "Nyuuyouji-Seishinhattatshitumonshi" here, but also to introduce music into childcare and consider how to develop it into a child's development process, and then, introduce actual examples into childcare. Further consideration needs to be given to the best way to introduce music into childcare and to look at what kinds of results could be expected.

Received Oct. 19. 2004

Key word : music, development, nursing

はじめに

幼いころから子どもたちは周りの音に何らかの形で関わり、影響を受けながら成長発達をしている。また、それ以前に母親の胎内に存在しているときから音や言葉に対して敏感に反応していることが言われている。乳幼児保育や延長保育が多くの保育園で行われ、また、預かり保育が多くの幼稚園で行われている。このなかで、0歳児から6歳児までの子どもたちが一緒に多くの時間を過ごしている現状において、保育現場は子どもたちにとって家庭と同じように生活の場である。また、保護者と同じく保育者も一人ひとりの子どもと多くかかわり、その子の成長に大きく影響を及ぼしていることに間違いない。このような状況のなかで、幼児教育の大切さ、保育者の役割の重要さとともに保育の質の向上が問われている。

この状況に対して、幼稚園や保育園では自己評価や第三者評価を受け、その結果を情報公開していくなど、保育の見直し・安全性・保護者との連携・地域の人たちとの積極的な関わりなど、保育のなかに多様な活動を取り入れながら、保育者一人ひとりの保育に対する意識を高め、

保育者同士のチームワークなかで子どもたちとともに生きる、ともに学ぶ姿勢が求められている。

目的

保育における音楽の役割は、生活や遊びを通してメロディー、リズム、ハーモニーを子どもたちに感じさせることと考える。音楽に対する受け取り方は年齢が低いほど受動的となり、保育者の毎日の歌いかけやリズムを意識した活動など、生活のなかへ音楽の導入が大切となってくる。例えば、朝やお帰りの挨拶においても子どもたちは毎日のリズム的な呼びかけや歌いかけに反応し、自然に言葉や表現などを体得しながら生活をしている。また、遊びのなかで子どもたちは自然の音や鳥達のさえずりに心を動かすことも多くある。この感動や心地よさが子どもたちに感性を育み、想像力や集中力などが育ち、「生きる力」を生み出す基になると考える。このように保育者は生活や遊びのなかにリズムを意識した活動や歌や楽器を自然な形で積極的に取り入れることによって、子どもたちは人としての生活の基盤作りの過程のなかに音楽の楽しさや言葉の獲得、また、人間関係などさまざまなことを学んでいる。この豊かな経験が今後大人に成長する子どもたちにとって音楽に対する意識の基礎となるであろう。

ここで、津守・稲毛式「乳幼児精神発達質問紙」〈1～12か月〉および〈1～3才まで〉と津守・磯部式「乳幼児精神発達質問紙」〈3～7才まで〉を、誕生日を迎えた園児に対して実施し、子どもたちの発達過程のなかで音楽に関係した活動項目の結果を検討する。そして、保育に音楽をどのように導入し発展させたらよいか、保育の実際の事例を紹介しながら保育における音楽のより良いあり方を考察していくことを目的とした。

方法

① 期間

平成13年4月から平成16年8月までの3年5か月間

② 対象園児

各務原市内にあるS保育園における1歳から6歳の誕生日を迎えた園児267名

表-1 乳幼児精神発達質問紙対象乳幼児数（H13年～H16年8月）

年齢	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児	6歳児	合計
実人数	17	32	45	54	52	67	267人

発達質問「1～12か月」

	H13年度	H14年度	H15年度	H16年度	合計
12か月	5	3	7	2	17
合計	5	3(8)	7(15)	2(17)	17

発達をふまえた音楽のあり方

発達質問「1～3歳」

	H13年度	H14年度	H15年度	H16年度	合計
1歳	0	2 (2)	2 (4)	0 (4)	4
2歳	12	8 (20)	6 (26)	6 (32)	32
3歳	11	15 (26)	13 (39)	6 (45)	45
合計	23	25 (48)	21 (69)	12 (81)	81

発達質問「3～7歳」

	H13年度	H14年度	H15年度	H16年度	合計
3歳	2	2 (4)	4 (8)	4 (12)	12
4歳		20	23 (43)	11 (54)	54
5歳		23	20 (43)	9 (52)	52
6歳		29	23 (52)	15 (67)	67
合計	2	74 (76)	70(146)	39(185)	185

③ 研究方法

- i) 対象園児の生年月日・入園時年齢・入園時月日・家庭環境・特記事項など基礎的資料作成をする。
- ii) 津守・稲毛式「乳幼児精神発達質問紙」＜1～12か月まで＞及び＜1～3才まで＞、津守・磯辺式「乳幼児精神発達質問紙」＜3～7才まで＞、をもとに、誕生日を迎えた園児に対して質問紙を実施し、「運動」、「探索・操作」、「社会」、「食事・排泄・生活習慣」、「理解・言語」の各領域の発達状態を把握し、その発達年齢により発達指数（DQ、developmental quotient）を算出する。素点合計が258を超えてDQが算出できない発達の著しい園児に対しては、3～7歳用の「乳幼児精神発達質問紙」を行う。本来、乳幼児精神発達質問紙は、母親か父親が各領域の質問項目に対して、できる事に○印、できない事に×印、時々できる・最近できるようになった事に△印を記入し、各領域の発達状態を見るものであるが、質問に対して甘く付ける親、厳しく付ける親など記入する親の子どもの把握の仕方が様々であるため、園生活を共にする保育士が記入することにより母親よりもより客観的な評価ができると考えた。また、保育所保育指針にあるように特定の保育士とのattachmentの重要性が述べられていることから保育士が記入することが最適と考えた。
- iii) 1週間ごとに子どもたちの観察記録を採る。「言葉（言語表現・文章構文・語彙数など）」、「音楽表現（歌遊び・手遊び・楽器遊びなど）」、「その他」の項目に従い通常の保育から子どもたちの発達を観察する。その記録をもとに4期（4・5・6月を1期、7・8月を2期、9・10・11・12月を3期、1・2・3月を4期）に区切り成長発達を観察する。（表－4参照）

平成13年1月より、「子どもの発達における言葉と自己表出」を園内研究として計画するにあたり保育士との話し合いを何度も持ち、保育士の理解と協力を求めた。

考察

1 子どもの発達からみる音楽表現

①乳幼児精神発達質問紙

乳幼児精神発達質問紙における「運動」、「探索・操作」、「社会」、「食事・排泄・生活習慣」、「理解・言語」の各領域の発達質問項目数は、全部で461項目ある。そのうち運動が108項目(24%)、探索・操作が104項目(23%)、社会が94項目(20%)、食事が79項目(17%)、理解・言語が76項目(16%)となっている。この全体の項目数を見ていくと「運動」領域が一番多い。受動的な身体統制から歩行の完成、運動技能まで子どもたちの体の成長とともにさまざまな活動項目が盛り込まれており、総項目数の半数が「1～12か月の質問紙」にある。「探索・操作」領域は、「1～12か月」と「3～7才」がほぼ同数の項目数を持っており、「音のした方に、首をまわす」など受動的な反応から外界探索を始める初歩の活動となっている。年齢が上がり表現・想像、表現・目標となり活動のなかに子どもたちの表現力や感性を培う項目が多くある。「社会」領域は相互交渉・自己規制であり子ども同士のかかわりや保育者や親との人間関係を豊かにする項目であり、約半数(45%)が「3～7才」の年齢に占めている。「食事」領域は「1～3才」の年齢に約半数(47%)の項目がある。この年齢期間において食事・排泄・生活習慣が自立する期間であり、自分でやろうとする意欲が生まれ、習慣づけする過程の活動が多く含まれている。「理解・言語」の領域は「3～7才」の年齢に半数(51%)の項目が占めている。言葉や文字の意味を理解し始め、お話や会話が豊かになり歌うことも上手くなり、身体表現や楽器を使って音色を楽しむこともできるようになってくる。

表-2 乳幼児精神発達質問項目数

領域	1～12か月	1～3才	3～7才	総項目数
運動	1.1～15.54 (54項目)	12.42～36.70 (28項目)	36.71～84.97 (26項目)	108
探索・操作	1.1～15.39 (39項目)	12.35～36.60 (25項目)	36.61～84.101 (40項目)	104
社会	1.1～15.29 (29項目)	12.24～36.47 (23項目)	36.48～84.90 (42項目)	94
食事	1.1～15.20 (20項目)	12.17～36.54 (37項目)	36.55～84.77 (22項目)	79
理解・言語	1.1～15.15 (15項目)	12.11～36.33 (22項目)	36.34～84.73 (39項目)	76
	157項目	135項目	169項目	461項目

1～12か月までの発達質問項目数は「運動」項目が54項目、探索・操作が39項目あり他の年齢における質問項目数や領域と比較しても一番多い。1～3歳までの質問135項目うち一番多いのは食事の領域(37項目)である。他の領域は平均して20項目台にあるということは、食生

発達をふまえた音楽のあり方

活が今大きく問題になっている食育との関係や第三者評価項目「I 子どもの発達援助 2 健康管理・食事」の項目にも食事を楽しむことのできる工夫として雰囲気づくり、食器の材質や形、食材の工夫など食生活に対して注意を払ったり、興味をもたせたりしていることが視点として上げられている。^(注1) 3～7歳までの質問項目数は全部で169項目あり他の年齢と比較しても一番多い。「探索・操作」、「社会」、「理解・言語」の領域で半分程度の質問項目がある。これらの項目からもそれぞれの成長発達のなかでどの活動が活発に行われ、大切かが読み取ることも可能である。そこから枝葉のようにさまざまな活動がお互いに関わりを持ちながら、それぞれの成長過程においてできるであろう活動に対して保育にどのように取り入れ配慮すべきかが導かれる。

この質問紙による診断法は昭和40年代に標準化されたものとして作成され、項目内容において今の時代にそぐわない項目が指摘されているものの生活年齢と発達年齢が発達輪郭表に明示されるため、理解しやすく望ましいと評価されている。^(注2)

②乳幼児精神発達質問紙からみる音楽活動

乳幼児精神発達質問紙から音楽活動に関係する項目を取り出し、平成13年度から平成16年度8月までの誕生児267名に、保育士ができる事に○印、できない事に×印、時々できる・最近できるようになった事に△印を記入し、各領域の発達状態を見た。内訳として「運動」領域において8項目、「探索」領域において11項目、「社会」領域において2項目、「言葉」領域において5項目抽出した結果である。(表-3参照)

表-3 幼児精神発達質問紙による音楽関係項目

領域	月齢	項目	対象園児	○(%) できる	△(%) ややできる	×(%) できない				
運動	11・40	手をひいて歩かせると、足を交互に運ぶ(歩行のための協応動作)	12か月(17名)	14	82	1	6	2	12	
	18・57 (1歳6か月)	かなりよく走る(歩行の完成)	1歳児(2名)	0	0	0	0	2	100	
			2歳児(32名)	32	100	0	0	0	0	
			3歳児(45名)	45	100	0	0	0	0	
	18・58	体操をまねて、リズムに合わせ、手、足、体を動かす(運動機能)	1歳児(2名)	2	100	0	0	0	0	
			2歳児(32名)	31	97	1	3	0	0	
			3歳児(45名)	45	100	0	0	0	0	
	21・60 (1歳9か月)	つまさきで歩く(運動機能)	1歳児(2名)	2	100	0	0	0	0	
			2歳児(32名)	25	78	4	13	3	9	
			3歳児(45名)	45	100	0	0	0	0	
	24・63 (2歳)	両足でビョンビョンとぶ(運動機能)	1歳児(2名)	2	100	0	0	0	0	
			2歳児(32名)	22	69	3	9	7	22	
			3歳児(45名)	45	100	0	0	0	0	
	48・75 (4歳)	片足で、けんけんしてとぶ(運動技能II)	3歳児(12名)	5	42	4	33	3	25	
			4歳児(54名)	34	63	16	30	4	7	
			5歳児(52名)	52	100	0	0	0	0	
				6歳児(67名)	67	100	0	0	0	0

仲野悦子

運動	54・78 (4歳6か月)	スキップを正しくする (運動技能Ⅱ)	3歳児(12名)	0	0	1	8	11	92
			4歳児(54名)	2	4	5	9	47	87
			5歳児(52名)	34	65	4	8	14	27
			6歳児(67名)	55	82	8	12	4	6
	84・96 (7歳)	かぞえ歌をうたいながら、まりをつく(運動技能Ⅲ)	3歳児(12名)	0	0	0	0	12	100
			4歳児(54名)	0	0	0	0	19	100
			5歳児(52名)	0	0	0	0	17	100
			6歳児(67名)	3	4	6	9	58	87
探索	2・4	音のした方に、首をまわす (受動的反応)	12か月(17名)	17	100	0	0	0	0
	2・6	みた物(ガラガラ、顔など)を目で追う(受動的反応)	12か月(17名)	17	100	0	0	0	0
	2・7	きげんのよいときは、あたりをみまわして、声をだしたり、手足を動かしたりして一人で遊ぶ (受動的反応)	12か月(17名)	17	100	0	0	0	0
	5・15	体のそばにある玩具に手をのぼして、つかむ(有位的操作)	12か月(17名)	17	100	0	0	0	0
	7・24	両手にもっている物を、打ち合わす(外界探索)	12か月(17名)	17	100	0	0	0	0
	21・51 (1歳9か月)	まりを受け取ったり、投げたりをくり返す(探索的試行)	1歳児(2名)	1	50	0	0	1	50
			2歳児(32名)	24	75	7	22	1	3
			3歳児(45名)	45	100	0	0	0	0
	36・65 (3歳)	きれいなものをみると、きれいだと感じる	3歳児(12名)	11	92	0	0	1	8
			4歳児(54名)	52	96	1	2	1	2
			5歳児(52名)	52	100	0	0	0	0
			6歳児(67名)	67	100	0	0	0	0
	36・67	自分でかっとな歌を考えて、うたう(表現・想像)	3歳児(12名)	5	42	5	42	2	16
			4歳児(54名)	25	46	14	26	15	28
			5歳児(52名)	16	31	4	8	32	61
			6歳児(67名)	35	52	2	3	30	45
78・97 (6歳6か月)	レコードをプレイヤーに自分でかけて操作する(表現・目標)	3歳児(12名)	0	0	0	0	12	100	
		4歳児(54名)	0	0	0	0	54	100	
		5歳児(52名)	1	2	1	2	50	96	
		6歳児(67名)	5	8	21	31	41	61	
84・100 (7歳)	ピアノで、好きなようにひく(表現・目標)	3歳児(12名)	0	0	0	0	12	100	
		4歳児(54名)	0	0	0	0	54	100	
		5歳児(52名)	20	38	5	10	27	52	
		6歳児(67名)	34	51	15	22	18	27	
84・101 (7歳)	かんたんな楽譜をみて、ピアノをひく(表現・目標)	3歳児(12名)	0	0	0	0	12	100	
		4歳児(54名)	0	0	0	0	54	100	
		5歳児(52名)	0	0	0	0	52	100	
		6歳児(67名)	3	4	6	9	58	87	
社会	48・57 (4歳)	かくれんぼして、さがす役とかくれる役とを理解する(相互交渉・自己顯示)	3歳児(12名)	1	8	1	8	10	84
			4歳児(54名)	23	43	11	20	20	37
			5歳児(52名)	52	100	0	0	0	0
			6歳児(67名)	66	98	1	2	0	0
	60・70 (5歳)	じゃんけんで、勝ち負けがわかる(相互規制)	3歳児(12名)	0	0	0	0	12	100
			4歳児(54名)	0	0	0	0	54	100
			5歳児(52名)	48	92	4	8	0	0
			6歳児(67名)	65	97	2	3	0	0

発達をふまえた音楽のあり方

言葉	1・1	話をするように声を出す（理解）	12か月（17名）	17	100	0	0	0	0
	10・5	おとなのことばを理解して行動する（理解）	12か月（17名）	14	82	1	6	2	12
	12・11	道具をみただけで、模倣的に使用する（理解）	12か月（17名）	0	0	0	0	17	100
	18・18 （1歳6か月）	自分の名前を呼ばれると「ハイ」と返事をする（言葉）	1歳児（2名）	0	0	0	0	2	100
			2歳児（32名）	26	81	4	13	2	6
			3歳児（45名）	45	100	0	0	0	0
	24・28 （2歳）	童謡に節をつけて部分的にうたえる（言語）	1歳児（2名）	0	0	0	0	2	100
			2歳児（32名）	16	50	6	19	10	31
			3歳児（45名）	45	100	0	0	0	0

（○できる、△ややできる、×できない）

「運動」領域において、1歳頃より「歩くことがほぼできる」ようになり（82%）、自分の思う方へ行ったり来たりと自分で歩くことが楽しくて仕方がないという時期である。1歳6か月頃になると、「よく走る」ことができ（2歳100%）、「つまさき歩き」をしたり（2歳78%）、「両足でピョンピョンとんだり」（2歳69%）、「片足とび」（4歳63%）などの動きが活発になる。そして、5歳児において多くの子どもが「スキップを正しくする」（5歳65%）ことができるようになる（52名中できる子ども34名、ややできる子ども4名、できない子ども14名）。また、「体操をまねて、リズムに合わせ、手、足、体を動かすことができるようになる」（2歳97%）になってくる。このような動きのなかにも音楽に合わせた表現が可能である。幼児歌曲の多くはスキップのリズムが含まれ、身体的に大きく成長するこの時期にさまざまな種類の歩きと走りのなかで、ゆっくり・速い、小さい・大きい、短い・長いなど自然に音楽のリズムを取り入れた動きをしていくなど、保育者は子どもたちの動きを意識しながら活動を発展させていくように援助しなければならない。「かぞえ歌をうたいながら、まりをつく」ことは6歳児にとって難しいようである。これは67名中ややできる子どもを含めても9名（13%）しかクリアされていない。昔のようにお手玉やまりをついて遊ぶことが日常的に少なく慣れていないことに原因があるように思われる。

「探索・操作」の領域において、音楽に関連すると思われる項目が一番多く見られる。2か月の月齢に対して音や物を目で追ったり、手足を動かして反応したりできる項目がある。人は胎内にいる時から外界の音に反応していると言われる。正高信男氏は0歳児が言葉を獲得する過程において、生後1～2か月位の赤ちゃんは音に対する反応パターンは複雑ではなく、強さの度合いがきわめて低い刺激にはほとんど注意を払わず、音量が増えることにより積極的に関心を示し、あるレベルで最高点に達しそこを超えると刺激への回避傾向を見せ始め、逆V字型のパターンがグラフに現れる。最適に注意が喚起される音量は母親がふだん語りかける時の声の調子の大きさとほぼ等しくなっていると指摘している。^(註3) また、「ヒトは一連のことばが発せられるのを耳にして、メロディーとしての響きから、当の発話がになっているメッセージとしての抽象的機能をおしはかることができるらしい」とも述べている。^(註4) このように発せら

れた時の音の調子や大きさによって多くの意味を理解していることになる。回りの音や物に興味を持ち、つかんだり打ち鳴らして確かめている。2歳になって殆どの子どもが「まりを受け取ったりに投げたりをくり返す」（できる75%、ややできる22%）ことができ、動きが活発になる。3歳になって、「きれいなものをみると、きれいだと感心する」ことができる（92%）。この年齢になって、音や物に対してきれい・うれしい・楽しいという感情がより膨らんでくるのであろう。保育者は子どもたち一人ひとりが満足する経験を1つでも多く体験できるような保育計画が大切となる。言葉も多くなりどの年齢も半数近くの子どもの「自分でかっとな歌を考えて、うたう」ことができるようになってきている。季節感を感じさせる歌や行事に関係する歌など機会を通して歌いかけたいものである。また、1つの曲を丁寧に歌ったり、繰り返して歌うことによって子どもたちの愛唱歌となっていく試みも大切と考える。「レコードをプレイヤーに自分でかけて操作する」項目は、今は経験できない内容であるが、カセットデッキの操作に変わるものであろう。「ピアノで、好きなようにひく」（できる5歳38%、6歳51%）、「簡単な楽譜をみて、ピアノをひく」（できる6歳4%）活動も経験がなければできない内容である。

「社会」（相互交渉・自己顕示、相互規制）領域においては2項目取り上げた。音楽活動と直接関係するものではないが、かくれんぼやじゃんけん遊びのなかにリズムを感じさせる動きを持っている。かくれんぼや鬼ごっこにはわらべうたとともに行なう遊びも多くある。（かごめかごめ、おおかみさん今何時！、ぼこぺん、だるまさんがころんだ、ことしのぼたん、通りゃんせ、あぶくたったなど）また、戸外で仲間同士で楽しむことができる。4歳頃よりじゃんけん勝ち負けが理解できるようになり、遊びとしていろいろなゲームに発展することができる。負けたものが周りを走る、周りを飛ぶ、ケンケンで行う、おんぶする、壁や遊具まではしる、席取りじゃんけん、じゃんけん列車、じゃんけん握手など勝ち負けを瞬時に判断しさまざまなルールを取り入れながら楽しむことができる。5歳児になってじゃんけんによる勝ち負けが殆ど理解でき、遊びの中に取り入れることが多い。その他、石蹴り、ケンパー、縄跳び、お手玉など動きのなかにリズムをとまなう活動は多くある。

「理解・言語」領域においては「探索・操作」領域と関係している。1歳児は喃語ではあるが一生懸命話しかけ、「おとなのことばを理解して行動する」（できる1歳児82%）ことは多い。しかし、「道具を模倣的に使用する」ことはできない。2歳頃になると「自分の名前を呼ばれると返事をする」（できる2歳児81%）ことができ、タンバリンを持って保育者の呼びかけに反応するかのように同じリズムで打ち返すことも楽しめる。挨拶する時など簡易楽器を利用してリズムとともに名前が呼ばれ、「ハイ！」という返事をまた楽器で打ち鳴らしながら返してくれる様子は見ることができる。「童謡に節をつけて部分的にうたえる」活動は、2歳児では50%、3歳児では100%で歌うことができる。特に「ピィピィピィ」「トントントン」など繰り返し言葉や擬声・擬態語の歌いやすい箇所にくると得意げに歌い出す子どもをよく見かける。

2 保育現場における音楽の実際

①U子の3年間の記録からみる表現活動（表-4参照）

平成12年6月20日、公務員の父と母の第1子として生まれ、平成13年4月1日、9か月で入園をしてきたU子の3年間の表現活動を紹介する。入園当初は泣いてばかりで保育士がそばにいないとだめな毎日であったが、次第に周りの友だちとの関わりも多くなってきた。この「保育士からみた子ども達の様子」はU子の言葉・音楽表現・その他（人間関係、社会性など）の項目にそって記録した成長記録である。1年間を4期に分け平成13年度（1歳児）、平成14年度（2歳児）、平成15年度（3歳児）のそれぞれ1年間の観察記録である。

- ・1歳時 U子は、平成13年4月1日、9か月で入園をしてきた。最初の1期から2期頃まで人見知りや保育士の後追いが多く、激しく泣いていることが多かったが、3期頃から園生活にも慣れ言葉も出始め、「アンパンマン」と得意になって保育士に言ってくるようになった。いろいろな歌を歌ったり、体を動かしたり保育士と一緒にやろうとしたり、友達と手をつないでわらべ歌にあわせて遊ぶことも楽しむようになってきた。
- ・2歳時 言葉も豊富になり、絵本を通しての活動・保育士や友だちの会話を通して楽しんでいる姿が見られる。そして、表現活動もとても活発になり手遊びなど体でリズムを感じ歌いながら表現している活動が多く見られる。この時期になると自然に歌いながら体が動かしたり、遊んでいる時にも自然に口ずさむことが多く見られる。H子やY子など友だちとの関係が豊かになり、そのかわりのなかで成長発達していることがこの記録のなかに読み取れる。
- ・3歳時 平成15年3月27日より母親が単身赴任となり、週末しか会うことができず情緒が不安定な時期が多かったが2期の終わりごろからやや落ち着いて生活ができるようになってきた。そのなかで自分のことだけを伝えるのではなく他の友だちや保育士に誘いかけられるようになってきている。そして、自分だけではなく周りの動きに注意を向けられるようになり、3歳以上児の子どもたちが行っている活動が気になったり真似たりしている。また、男の子の友だちや年下の子にも興味をもち、お世話をしようとしたり手をつないであげたりしてかわわりを楽しんでいる姿がよく見られるようになって来た。表現活動もしっかりできるようになり、自分で楽しめるようになってきた。

U子の表現活動からも分かるように、日常の活動のなかに保育者が意識して歌いかけたり話しかけたりすることは多い。そして、手遊びなど生活のなかに積極的にリズムを感じられるような活動を多く取り入れ、ともに楽しんでいる。また、1つの活動が次の活動につながって行くような連続性ある動きを持たせる。例えば、絵本のなかのお話を生かしパネルシアターやリトミックに取り入れたり、オペレッタでお話の登場人物になりきったりする活動は多い。日常的にも子どもたちがテレビアニメの勇敢なデカレンジャーになりきって戦っている姿はよく見る。保育者は子どもたちの思いをどのように表現させ発展させるか、子どもの思いや動きをまず見守ることが大切な第一歩である。

仲野悦子

表4-1 保育士からみた子ども達の様子
園児名 U子 H13年度（生年月日 H12年6月20日・入園年月日 H13年4月1日9か月）

月	言葉 (言語表現・文章構文・語彙数)	音楽表現 (歌遊び・手遊び・楽器遊びなど)	その他
1期 4 5 6	<ul style="list-style-type: none"> 「ばばばばー」など喃語が盛んである。 		<ul style="list-style-type: none"> 人見知りや保育士の後追いが多く、激しく泣いていることがある。 1歳過ぎになるとさらに人見知りが激しくなった。
2期 7 8			<ul style="list-style-type: none"> 年長児がかまってくれるようになる。泣いて嫌がられても根気よく接してくれる。そのためかその年長児に甘える姿も見られる。 盆休暇後担任以外泣くなど前に戻る。
3期 9 10 11 12	<ul style="list-style-type: none"> アンパンマンに興味を示し「アンパンマン」と言えるようになり、保育士にはっきり伝えようとする。 他のキャラクターも「アンパンマン」である。 名前を呼ばれると「ハイ！」と返事をしっかりして手も上げられるようになる。 自分のことを「Uちゃん」と言うようになる。 	<ul style="list-style-type: none"> 『どんぐりころころ』の歌を簡単な振り付けをしながら歌う真似をする。 保育士のする手遊びや歌は大好きで一緒にやろうとする。 『赤鼻のトナカイ』のダンスが気に入っている。 『かごめ』など友だちと手をつないで遊ぶことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 夏すぎにすっかり園生活には慣れてきた。それと同時に自分の思いをぶつけるようになり、玩具の取り合いでは激しく取り合い、絶対ゆずろうとしない。 思い通りになるまでお泣きする。 友達の本真似をして「おいで」と手招きすることがある。
4期 1 2 3	<ul style="list-style-type: none"> 取り合いで「イヤイヤー」と連発するようになる。 はっきりとは聞き取れないが、言葉の数は増えた。 絵本の中の動物を見て「ワンフ」や「ニャーオ」と少しずつ分かるようになってきた。 帰りの挨拶も言えるところは、自分で言おうとする。 		<ul style="list-style-type: none"> よく真似をすることが多い。そのおかげでオマルへ行ったり、パンツを脱いだりすることを積極的にしている。

発達をふまえた音楽のあり方

表4-2

保育士からみた子ども達の様子

園児名 U子

H14年度(生年月日 H12年6月20日・入園年月日 H13年4月1日9か月)

月	言葉 (言語表現・文章構文・語彙数)	音楽表現 (歌遊び・手遊び・楽器遊びなど)	その他
1期 4 5 6	<ul style="list-style-type: none"> 動物の絵本が好きで「読んで」と持ってくる。 「これ〇〇」と教えてくれる。 Uちゃん(ちゃんとたんの間くらいの発音)という。 砂団子を「ボール」と言ったり、積み木でケーキを作るなど想像している。 絵本など「Uちゃんの」と言う。他の子も言う、「みーちゃんのおよ(みんなのよ)」と教えてくれる。 	<ul style="list-style-type: none"> 『パンダうさぎこあら』の手遊びを聞いて、少しづつチャレンジしていく。 『おかあさ』『おうま』など歌詞の分る部分を歌う。その他の歌も言っていることははっきり分らないがリズムが合っている歌が多い。 マークさんの英語教室に積極的である。 	<ul style="list-style-type: none"> H子と仲良しだが、その分けんかもする。 友だちとよく玩具を取り合いになり泣いている。 鉄棒にぶらさがったり、片足立ち、つま先立ちなどできる。 自分でパンツ・ズボンが脱げる。 相手の様子を伺いながら、相手にしてもらいたくて自分から手(ちょっかい)を出す。
2期 7 8	<ul style="list-style-type: none"> 競争するのが好きで、1番やたくさんがよいらしい。 「Uちゃんのちっちゃいよ」と大ききの区別ができる。 「嫌」と言いながら逃げていくのが楽しいよう。 H子、S男、Y子の言葉の影響が大きい。(給食時など、友だちがいるかないかで口数が全くちがう)。 	<ul style="list-style-type: none"> 『時計のうた』を歌うと「こっちかっちおとけーさん」という感じでリズムは合っている。 ぞうのぬいぐるみを見て「ぞーさんが忘れていった…」と連想して手遊びをする。 歌を歌う時、手は後で組み、胸を張り、目が細くなっている(顔がしかめ面になり大きい声で頑張る) 	<ul style="list-style-type: none"> 給食の時正座をしていることが多い。 酢物など野菜をよく食べるが、家ではそうでもない。 自分から玩具を貸すなどけんかが少なくなってきた。 模倣するのが上手。 自分でパンツ・ズボンが履ける。 友だちの真似をするのが好き。鼻水がよくでる。
3期 9 10 11 12	<ul style="list-style-type: none"> 嫌なことがあると、言葉よりも先に泣いてしまい、なかなか落ち着くことができない。 また、怒られても目を合わさず話も聞かないところもある。 保育士や友だちの言葉をたくさん覚えた。特に叱る時に真似し、同じ状況の時に、友だちに「〇〇したらめーよ」と言う。 『トントン』という絵本で、「Kくんのお鼻ブタさんみたい」とよく見ている。 「Uちゃんのおよ」と気に入った物はずっと持っていたい。 	<ul style="list-style-type: none"> H子やY子の真似をして、『ハム太郎』や『ドラえもん』など楽しく歌っている。 カスタネットに合わせて「Kちゃん」と呼んだり「はあい」と返事している。 『ハリケンジャー』の体操を張り切って行う。遊びの中でも口ずさむ。 	<ul style="list-style-type: none"> トイレトレーニングを開始する。「お姉ちゃんパンツだよ」と嬉しそうに自分からトイレに行く。 知らない人にも大きな声で挨拶やお話ができるようになってきた。 お母さんが大好きで、お迎えがお父さんの時、泣いて嫌がり2～4日なれなかった。 家では箸を使用。ごみを捨てに行く。 おちょんぼをしてもらいたい。
4期 1 2 3	<ul style="list-style-type: none"> 「Uちゃんのおブタクん」「Uちゃんのおドレミちゃん」と自分の好きな物を主張してみんなに知らせる。 「Uちゃんつくったよ」「これ〇〇だよ」とブロックやままごととセットでつくったものを見せ教えてくれる。とてもうれしそうに笑顔で見ている。 自分でできることが増えてきたため、それがとても嬉しいようで保育士に伝えてくれる。 	<ul style="list-style-type: none"> 『ゆき』の歌を元気いっぱい歌う。 H子やY子と一緒に、『ハム太郎』や『ドラえもん』などを大きな声で歌う。また、踊って楽しむ。 『ネコのお医者さん』を口ずさみながら、ブロックやままごととセットを使って遊ぶ。 『つくしんぼ』、『アンパンマン』の手遊びを喜ぶ 	<ul style="list-style-type: none"> Y子やH子の真似をして、いろいろな事に挑戦する。 室内で過ごすことが多く、O男の手本となって遊んでいる。 ブロックで作るものも大きく、複雑になってきた。 オマルでウンチに成功。午睡時もパンツだけになる。 3月27日より母親が単身赴任となり、少し情緒不安定になった。

表4-3 保育士からみた子ども達の様子
園児名 U子 H15年度(生年月日 H12年6月20日・入園年月日 H13年4月1日9か月)

月	言葉 (言語表現・文章構文・語彙数)	音楽表現 (歌遊び・手遊び・楽器遊びなど)	その他
1期 4 5 6	<ul style="list-style-type: none"> 以前にあったことは全て昨日になる。 「Tちゃん〇〇したよ、先生も〇〇したい？」と自分のやったことを伝えるだけでなく、誘いかける。 	<ul style="list-style-type: none"> 保育園で歌った歌や自分の好きな歌を歌いながら遊ぶ。 以上児の太鼓の真似をする。 	<ul style="list-style-type: none"> 母親が単身赴任中で、週末に会えない時もある。会えない週は特に不安定になりがちである。 昨年から同じクラスの子と一緒に誘い合って遊ぶ。
2期 7 8	<ul style="list-style-type: none"> 「Uちゃんねー 〇〇でねー 〇〇やってねー」と文が長くなる。文中に「ねー」が入ることが多い。 一緒に遊んでいる子にも意見を聞いて遊ぶことがある。 	<ul style="list-style-type: none"> 他のクラスの歌や遊戯を覚え、踊る。 タンブリンを歌に合わせて打とうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> 登り棒に興味を持ち、足をすりむきながらも何度も練習して登れるようになる。 足がとて速い。 母親と会わなくても落ち着いてきた。
3期 9 10 11 12	<ul style="list-style-type: none"> 他の子の言葉を正したり、ごっこ遊びのなかでそれぞれの役になりきった言葉を使おうとする。 数をかぞえたり、文字のようなものを書こうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> 鼓隊のリズム打ちを曲に合わせてする。 歌が好きですぐに覚えて歌う。 	<ul style="list-style-type: none"> 母親が帰ってきたり、週末に帰ってくるが多くなり、落ち着いている。 女の子だけではなく男の子とも仲が良くなり、いろいろな子とかかわって楽しめるようになってきた。
4期 1 2 3	<ul style="list-style-type: none"> 自分の名前の文字を読んだり、ひらがな・数字・英文字に興味を持ち、何かを聞く。どんな文字か言うこともある。 	<ul style="list-style-type: none"> 半年間前に歌った歌でもよく覚えていて、自分で歌う。 他のクラスの遊戯や歌を覚えて楽しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> 年下の子にも興味を持ち、お世話をしようとしたり手をつないだりする。 誰かが休んでいたりと、名前を言ってくる。

千葉県富津市にある和光保育園園長鈴木眞廣氏は「遊びとは何か？」と問うとき

1、遊びそのものが楽しみであること。その楽しみのためにするのが遊びであり別な目的のためにするものでない。

2、子どもが子ども自身でその場をしきれるということが大事で、大人に指導されたり、指示されてやるものではない。

と述べている。^(注5) 自然を生かした環境のなかで子どもたちが思い思いの活動を繰り広げる。保育者が遊びをお膳立てするのではなく、子ども自身が遊びを見つけ創りだしていくこの保育園の取り組みは、遊びの環境を十分配慮しながら同年齢や異年齢の子どもを問わずかかわりを深め、子どもたち同士が教え学びあい、結果的に子どもたちの自立を促し豊かな感性を育てているようであった。

②発達をふまえたリズム遊び

ここに、研究主題「発達をふまえた子どもの心と体づくり」をテーマにした実践事例を紹介

発達をふまえた音楽のあり方

する。多治見市保育研究会（市内12保育園）が昭和57年より約20年間^(注6)あそび、描画、言語、環境などを研究の窓口にして子どもの発達の筋道を科学的に学習するなかで体・運動のレベルの遊びを土台に手指から認識のレベルへと高められていくことが確認できた取り組みの実践研究である。平成6年度より、さらに子どもの育ちの様子を探るなか、リズム遊びを通して体の面では「しなやかな体の子」、心の面では「自分の気持ちをコントロールして行動できる子」を願う子どもの姿とした。「指先まで意識して動く、リズムカルである、機敏な動きができる」ことをリズム遊びにおける子どもの姿とし、実際保育士たちは曲に合わせながら具体的な動きやポイントを確認し合う。金魚・どんぐり・四足ハイハイ・うさぎ・汽車などの「具体的な動き」、「獲得できる力」、「リズム遊びをする子どもの姿」（しなやかな動きへの段階）、「援助」を共通理解しながら未満児から年長児までリズムを意識した取り組みでもある。平成9年度より「リズム遊び」と「生活・遊び」を結びつけ、体の面と心の面の両面を視点にあて関連づけを試みた保育である。（表-5参照）

0歳児から2歳児（未満児）においては、「足・腰を強くする」、「保育者との信頼関係の中で心地よいと感じる気持ちを育てる（安心感）」ことを視点においた。触れ合って遊ぶことを大切にゆさぶり遊びや散歩をとおして信頼関係を築き、心から笑いが生まれたり、やってもらうだけではなく友だちにやっであげる関係が生まれた。音楽に合わせての動きも正確さは望めないが保育者は常に正しい動きをし、子どもに分りやすい言葉がけを工夫したりしながらの活動である。つまさき歩きや両足で歩くこともできるようになり、全身運動から手・指の操作にも遊びを通して目を向けた保育である。

3歳児においては、「足の蹴りの力を育てる」、「子どもの気持ちを十分受けとめ、少しずつ自制する力を育てる」ことを視点においた。鬼ごっこを通してルールに合った遊びやけんかを通して相手の気持ちを思いやったりすることができ、少しずつ譲ったり我慢したりできる子が多くなった。トラブルを経験することは自制心が育っていく上で大切なことであり、保育者の関わり方も大切となってくる。リズム遊びにおいて具体的な言葉がけによりイメージを膨らませたりしながら体いっぱい動かす楽しさを味わい、「うさぎ」の表現では、ベタベタと重い動きで跳んでいた子も少しずつ軽く跳ぶことができたり、「トンボ」の動きではジーッと止まっていることができずフラフラしてしまうが一生懸命止まろうとする姿が見られ、バランス能力を高めることができるようになってきた。

4歳児においては、「自分の体をコントロールしようとする力を育てる」、「友だちとの関わりの中で、＜～ダケレドモ～スル＞気持ちを育てる」ことを視点においた。園外に出てでこぼこ道・落ち葉の敷き詰めた坂道・草木の茂った道・がけのぼりすべりなどに挑戦しコントロールする力をつけていった。「足の先に力を入れると転ばない」と言葉がけしたり手でバランスを取ったり自分の心と葛藤しながらの遊びでもある。ひとり縄跳びでは歌や曲に合わせて跳ぶ。鬼ごっこをしながら楽しさや面白さを知らせ、身体をコントロールすることを心がけている。

表-5 発達の特徴とリズム遊びにおける留意点

年齢	発達の特徴		心と体の視点	リズム遊びにおける留意点	研究会で取り上げた生活・遊び
〇歳 〜	<ul style="list-style-type: none"> ・這い這い ・片手支え歩きから歩行へ 	<ul style="list-style-type: none"> ・首のすわり→寝返り→這い這い ・歩行のための準備期 	<ul style="list-style-type: none"> ・足、腰を強くする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・触れ合って遊ぶ事を大切にする。 ・十分這い這いして脊柱や腰、手を開く運動を十分に行なう。 ・大人が十分に相手をし、声を出して笑う活動を豊かにする。 ・玩具を持たせながら、手の操作性を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ゆさぶり遊び ・玩具（形、重さ、なめらかさの違う物） ・散歩土、草、砂、斜面、でこぼこ道
一歳 〜	<ul style="list-style-type: none"> ・歩行の確立 ・簡単な道具の使用 ・自我の芽生え ・一語文 	<ul style="list-style-type: none"> ・バランスをとる歩行→歩行の確立 ・手指を使った運動の種類が、確実に豊かになる。（つまむ、通す、蛇口の開閉、道具を使うなど） ・「～ダ～ダ」と主張する。 ・「～デハナク～ダ」の力がついてくる。（イヤ・ハイ＝ジブンデ）（対の提示） ・見返りの指差しを獲得する。 ・勝手きままに遊ぶ ・身の回りの人や物に興味を示し自発的に働きかけていく。 ・模倣ができ、みたてる力がついてくる。 ・方向転換ができる。（段差のある所は、向きを変えて足より降りる） ・一語文が豊かになり、二語文が始まる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・足、腰を強くする。 ・保育者との信頼関係の中で、心地よいと感じる気持ちを育てる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・触れ合って遊ぶ事を大切にする。 ・上下、左右のバランスをつける。（協応する働き） ・リズム、歌に合わせて体を動かす事を大切にしていける活動を行なう。（躯幹、手の開き、足の蹴りを中心にした取り組みを行う） ※躯幹とは、からだ特に頭・四肢を除いた部分 ・手・足腰の力の充実を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・探索活動 ・ゆさぶり遊び ・変化する素材（砂、水、泥など） ・ボール遊び ・散歩 ・ゆるやかな斜面のはい登りやマットの山など
二歳 〜	<ul style="list-style-type: none"> ・歩く、走る、跳ぶ 	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的な運動能力が伸びる。転ばないで歩く。歩行がしっかりしてくる。腕を振りながら腰を落として両足で飛ぶ ・手指の働きが急速に進歩する。また、左右の手に関係ができ、添える手の働きが出てくる。前ばたんの掛けはしができる折り紙の角を合わせて折ろうとする ・ちぎる、丸める、伸ばしたりして遊ぶ ・皿に手を添えられるようになる ・思い通りにならず、時にはかんしゃくを起こしたり、反抗して自己主張する。 ・大人の手を借りずに何でも自分でしようとする。「ジブンデ」 ・二語文～三語文、助詞を使って話すようになる。 ・簡単なごっこ遊びをするようになる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・足、腰を強くする。 ・保育者との信頼関係の中で、心地よいと感じる気持ちを育てる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・触れ合って遊ぶ事を大切にする。 ・保育者が正しい動きを示す。 ・歩く力を基礎とした活動、体を使った遊びを意図的に取り入れる。 ・全身運動の安定を支えに手、指の操作を豊かにしていく。 ・全身でリズムを受けとめ、そのものに成りきっている姿を大切にする。 ・具体的な言葉かけをしたり、体を手に添えたりして、動きの方向性を示す。 <p>両足とびの完成 片足で体を支えて跳んだり、左右に重心を移しケンケンができるようになる</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ゆさぶり遊び ・追いかっこ ・散歩（見通しをもって歩く） ・平均台 ・ブランコ ・三輪車 ・トランポリン ・ケンパ ・でんぐり返し ・両足とび

発達をふまえた音楽のあり方

<p>三歳</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・対の疑念成立 ・「～シテカラ～スル」 ・唯我独尊 ・「～ダカラ～スル」 	<ul style="list-style-type: none"> ・手・指、全身運動（足、腰）の基礎がほぼ完成し、体のコントロールができる。（走りながら方向変換ができる） ・話し言葉の基礎ができる。 ・基本的な生活がわかり、自分からしようとする。 ・自我がはっきりしてくる。 ・「なぜ」「どうして」という質問が盛んになる。 ・友だちとの遊びを楽しむようになる。 ・自分の体験した範囲内で、見通しをもった行動ができるようになる。 ・園生活の流れを知り、保育士の言葉がけで次の行動につなげられる。 ・ひとり言を言う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・足の蹴りの力をつける。（足親指に力をこめる） ・子どもの気持ちをいっぱい受けとめ、少しずつ自制する心を育てる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・体をいっぱい動かす楽しさを味わわせる。 ・保育者が正しい動きを示す。 ・具体的な言葉がけによりイメージを豊かにする。 ・リズム運動の中でも平衡感覚、瞬発力、柔軟性を養い、足先、手指、全身を使って遊ぶ。 <p>スキップができはじめる</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・平均台 ・ブランコ ・三輪車 ・トランポリン ・ケンパ ・でんぐり返し ・体操
<p>四歳</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「～シナガラ～スル」 ・「～ダケレドモ～スル」（心や体を自制する力の芽生え） 	<ul style="list-style-type: none"> ・体の動きが巧みになり、2つの意識を1つにまとめた行動ができる。（登り棒など） ・自意識が芽生え、心の葛藤を体験する。事で他人の気持ちがわかるようになる。 ・仲間とのつながりは強まるが喧嘩も多くなる。 ・自分の気持ちを抑えたり、ことわがわかってやり直すようになる。（自励心） ・話し言葉を十分使って会話するようになる。 ・3つの世界が形成され始める。（大中小・昨日今日明日） ・言葉で気持ちを調整するようになる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の体をコントロールしようとする力をつける。 ・友だちとの関わりの中で「～ダケレドモ～スル」という気持ちを育てる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な体の動きが必要となる遊びを取り入れる。 ①ゆっくり、速くなど音楽にあわせて行動を変える遊び ②ケンケン、スキップ、鬼ごっこ（方向転換）など ・動と静の動きを組み合わせ、全身あるいは体の部分の筋肉を緊張させたり緩和させたりする活動をしていく。 ・個人差の大きい年齢であることを考慮し、一人ひとりの姿を受け入れながら行う。 ・友だちの動きを見る場を大切にしていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・木登り ・すもう遊び ・マット ・綱引き ・ごっこ遊び
<p>五歳</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・大、中、小などの中間項の認識 ・協力して行う（役割がはっきりしてくる） ・「～ダケレドモ～スル」 	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的な生活習慣がほとんど確立。 ・全身を使った運動や操作がより巧みになり、2つの意識を1つにまとめた行動ができる。（竹馬など） ・3つのものを比較する力がついてくる。 ・自分なりに考えて物ごとの判断ができる基礎が培われる。 ・集団の中で自己調整する力がついてきて行動できる。 ・同じ目的に向かってまとまって行動するようになってくる。 ・相手にわかるよう、筋道をつけて話すようになる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・体のしなやかさを育てる。 ・指先まで意識した動き ・リズムカルな動き ・機敏な動き ・意識して行動する力を育てる。（気持ちのコントロール） 	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちの動きを見る場を大切にしていく。 ・友だちと呼吸を合わせて行うリズムを取り入れていく。 ・だんだん速さを変えながら遊び、コントロールする力をつける。 ・協力して行うような遊びを取り入れる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・跳び箱 ・ゴムとび ・縄とび ・鉄棒 ・リレー ・竹馬 ・プール遊び ・わらべ歌遊び ・集団遊び ・当番活動 ・雑巾がけ

この年齢でスキップも多くの子どもができるようになる。^(注7) 曲のテンポが速くなるとギャロップになってしまうため速さを換え、足を交互に出しやすくする。「汽車」では車輪のイメージをもって大きく回したり、小さく回したりして手の動きを意識させた。この動きは走り縄跳びの動きの基になる。このように1つの動きがさまざまな動きに発展して遊びを膨らませることを教えてくれる。

5歳児においては「体のしなやかさを育てる」、「意識して行動する力を育てる」ことを視点にしている。自分の力で自分の全身を律する。自分の体や気持ち（心）をコントロールできる調整力をつけることを目的とし、当番活動、鉄棒・プール遊びなどを取り入れた。

リズム遊びでは指先まで意識した動きや静と動の交互の動きなどの活動である。友だちの動きを見たり励ましを受けたりしながらやりとげ、できた喜びを得ることにより自信となり次の活動へつなげていく取り組みである。これらの活動はコーディネーショントレーニングと合い通じるものがある。

コーディネーションとは調整力とか協応性といわれ、「周囲の状況や用具等の操作に関わる情報を目や耳あるいは手・足など五感で察知し、それを頭で判断し、具体的に筋肉を動かすといった一連の運動過程をスムーズに行う能力」であり、内容的には定位・変換・リズム・反応・バランス・連結・識別能力の7つに分類されている。^(注8) そのなかの1つであるリズム能力は、耳による音や音楽、あるいは真似するときの目からの情報を動きによって表現したり、イメージとして持って動きのリズムの現実化を可能にするとし、集団演技としても欠かすことができないとしている。

この発達をふまえた心と体づくりの研究は音楽のみの活動ではなく、子どもたちの発達を意識し、さらに生活と遊びのなかに自然にリズムを意識させながら行った活動である。また、幼児の表現の特徴を生かした活動でもある。「活動や遊びは、体が動くこと、体と心が連動してはじめて可能になる。」^(注9) とし、表現の基本が体の現わしであり、体の機能の発達と知的な発達がともに大切としている。このように保育においてそれぞれの領域や活動のみで教育・保育が成り立つのではなく、発達を軸に5領域がすべてに関連し合い働きかけていくものである。保育者が何を意図しているかによって子どもたちの活動は広がっていく。その活動は途切れるものでなく、枝葉のように次の動きへとつながり継続性を持つものである。20年間のこの取り組みはこのことを教えてくれる。

おわりに

保育における音楽活動は、子どもたちの生活の一部である。さまざまな歌を歌う、楽器を楽しむだけの活動ではなく、その音楽活動が子どもたちにとってどのような意味があるのだろうか。子どもたちの発達過程に必要なのであろうか。など理論的な検討は必要である。1つの歌を歌いこむ・オペレッタを創り上げるなど、それが行事に向っての保育であってもその過程を

どのように子どもたちと保育者が向かい合うかが大切なことである。

また、それぞれ園には理想とする子ども像がある。その子ども像を考えると「保育者は何を子どもたちに育てたいか」、「何を求めてその活動を設定しているのか」を常に意識しながら月案・週案・日案など計画を立て活動につなげている。その活動はクラス単位の活動であったり園全体で取り組む活動であったりする。同年齢活動から異年齢の活動、設定保育から自由保育など様々であるが、そのなかの様々な取り組みは子どもたちにとって必要であるかを意識することは大切である。これらのことから保育内容を検討するだけでなく、総合的な保育の質や保育者の質が問われることは当然であり、保育者として常に研鑽していかなければならない。

注

注1 社団法人全国保育士養成協議会「児童福祉施設福祉サービス第三者評価機関（HYK）」における保育所に対する訪問調査項目一覧において、Ⅰ子どもの発達援助（24項目）、Ⅱ子育て支援（8項目）、Ⅲ地域の住民や関係機関（8項目）・団体との連携、Ⅳ運営管理（11項目）に分けられ、総数51項目において自己評価ならびに第三者評価としての質問項目が上げられている。「Ⅰ子どもの発達援助」には、発達援助の基本（5項目）、健康管理・食事（6項目）、保育環境（2項目）、保育内容（11項目）の項目があり環境・取り組み・配慮など子どもたちの毎日の活動に対して保育内容や保育者の援助が指摘されている。

「表現」項目としてはⅠー4保育内容（18）に「さまざまな表現活動が自由に体験できるように配慮されている。」の問いかけがある。小項目として、6項目ある

ア 子どもが自由に歌ったり、踊ったりする場面がみられる。

イ さまざまな楽器を楽しめるようになっている。

ウ クレヨン・絵具・粘土・紙など、さまざまな素材を子どもたちが自分で使えるように用意されている。

エ 子どもの作品が保育に活かされたり、工夫して飾られたりするなど、大切に扱われている。

オ 身体を使ったさまざまな表現遊びが取り入れられている。

カ 絵本の読みきかせや紙芝居などを積極的に取り入れている。

注2 保育学会第57回大会 武井幸子「障害児の精神発達に関する研究」において検討されている。様々な環境の変化によって子どもの生活は変化しており、現在の生活条件下によって改訂・修正が待たれるが、生活年齢発達年齢が発達輪郭表に明示される点で障害をもつ子どもの診断には理解しやすいと指摘している。

注3 正高信男著『0歳児がことばを獲得するとき』 中公新書 2003

「第六章 メロディーがメッセージ」 pp120～140

- 注4 正高信男著『0歳児がことばを獲得するとき』 中公新書 2003 p126
- 注5 2004.1.1「保育通信No.584」保育を考えるシリーズ③「遊び再考」（遊び最高！）
 保育者が「砂場遊び」・「リズム遊び」・「運動遊び」などあらゆる活動に遊びという言葉をつけている。この場合の遊びは、保育者が指導の手立て・方法としてとらえる場合の活動を指していることが多い。と指摘し、「遊び」は、子どもが子どもであることの本質を包含しており、遊びがなくなったり、遊べない状態になっているとすれば子どもにとって危険であるとも述べている。
- 注6 岐阜県保育所職員 自主研究グループ研究報告書「発達をふまえた子どもの心と体づくり」として、平成15年2月岐阜県保育士研究発表会にて報告された。
 研究の歩み
- | | | |
|---------|-------|---------------------------|
| S57～59年 | あそび | 発達理論を学ぶ。発達段階表を作成する。 |
| S60～62年 | あそび | わくわくするようなあそびの取り組み方を探る |
| | 描画 | 0～6歳児までの描画の発達の道筋を確かにする |
| | 体育あそび | あそびを通して足腰を鍛える。 |
| S63～H2年 | あそび | わくわくするようなあそびの取り組み方を探る |
| | 描画 | 豊かな絵を求めて（心を揺さぶるあそび、生活） |
| | 言語 | 思っていることをはっきり話せる・楽しくはなせる子に |
| H3～5年 | あそび | 主体的に遊べる子を目指して |
| | 描画 | 思いやり感動が語れる絵を求めて |
| | 環境 | 思いが出せる環境作り。生き生きと主体的に遊べる環境 |
| H6年～ | リズム遊び | リズム遊びを学ぶ。子どもの生活遊びから発達を探る。 |
- 注7 平成13年度のスキップ調査結果（対象園 多治見市内保育園11園、実施月 8月と2月、対象児 3歳～5歳）によれば、1回目の（8月）平均は3歳19%、4歳52%、5歳88%（3歳最低0%・最高45%、4歳最低32%・最高71%、5歳最低77%・最高96%）、2回目の（2月）平均は3歳61%、4歳80%、5歳97%（3歳最低38%・最高82%、4歳最低72%・最高98%、5歳最低94%・最高100%）であった。6か月間の取り組みで2園が3歳児においてできた子どもの割合が18%と82%（差64%）となり大きな変化が見られた。5歳児ではほとんどの子どもが軽やかにスキップできるようになり、日頃の取り組みの成果が現れた結果となっている。
- 注8 東根明人・平井博史著『キンダーコーディネーション』全国書籍出版 2002 p18
 5歳～8歳ころ（プレ・ゴールデンエイジ）は神経型が著しく発達する時期であり、多様な刺激を体が求める年齢である。この間に飽きさせないで楽しませるためのプログラムとして、器具など主運動を行うまえの「動きづくり」としてゲームや遊びなどが有効

発達をふまえた音楽のあり方

であるとしている。その活動の動きに対して理論的にコーディネーション能力が位置づけられ、対象年齢・実施方法・ポイントが多く紹介されている。

- 注9 小林美実著 1 展望「幼児の表現、その考え方と教育法」保育学研究
第40巻1号 2002 p108

参考文献

- 1 正高信男著『子どもはことばをからだで覚える』中公新書 2001
- 2 正高信男著『0歳児がことばを獲得するとき』中公新書 2003
- 3 金田利子・諏訪絹・土方弘子編著『「保育の質」の探求』ミネルヴァ書房 2001
- 4 多治見市保育研究会 岐阜県保育所職員 自主研究グループ研究報告書
『発達をふまえた子どもの心と体づくり』岐阜県保育研究協議会 2003
- 5 東根明人・平井博史著『キンダーコーディネーション』全国書籍出版 2002
- 6 落合聰三郎監修『保母がえらんだ遊びの本』文化書房博文社 1984
- 7 小林美実著 1 展望「幼児の表現、その考え方と教育法」保育学研究
第40巻1号 2002 pp104～113
- 8 仲野悦子・後藤永子著『子どもの発達における言葉と自己表出』
岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要第35集 2003
- 9 仲野悦子著『幼児歌曲からみる音楽指導の一考察』
岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要第36集 2003
- 10 津守真・稲毛教子著『乳幼児精神発達質問紙1～12か月まで』
大日本図書株式会社 1961
- 11 津守真・稲毛教子著『乳幼児精神発達質問紙1～3才まで』大日本図書株式会社 1961
- 12 津守真・磯辺景子著『乳幼児精神発達質問紙3～7才まで』大日本図書株式会社 1961
- 13 津守真・稲毛教子著『増補乳幼児精神発達診断法0～3才まで』大日本図書株式会社
1995

付記

この研究にあたりS保育園の小川愛子園長および保育士の方々の協力を致します。